

田辺謙二 たなべ けんじ

開教百二十年記念事業事務局（百二十年史）主幹

あの日から三十年

本年九月二十三日、三代さまご昇天からちようど三十年を迎える。

♪もう三十年の時が……♪

ご昇天から一連の記憶は、今も多くの人の脳裏に刻まれていることだろう。現身うつせみの三代さまにまみえた信徒にとつて、三十年の時を越え、今も懐かしく、慕わしいお方である。

今回は「その日」、九月二十三日の様子をお伝えしたい。

ご昇天二日前のメモには、ある処置



秋草に囲まれた三代さまのご遺影（みらく殿で執行された大本葬には各界の代表をはじめ全国から八千人が参列した）

が行われ、「劇的な効果が出ている」とある。この情報が伝えられ、四代さま当時、教主代行）をはじめ、関係者一同、皆、安心していた。

治療が効果をもたらし、心配はない。ご昇天前日も、安定したご様子は変わらなかった。

しかし、九月二十三日、午前九時前、急激に血圧が低下（上が六十）し、ご容態が急変。看護師が慌ただしく病室に出入りし、医師が駆け付けた。

室外には心拍を伝える電子音が「ピッ、ピッ」と響いていたが、次第に、その音は不規則になっていった。

それまで入室が止められ、廊下で控えていた人たちも、次々と病室に入りはじめた。三十人近くが入室。

四代さまは、前日から病院に泊まれ、病室で付き添われていた。

午後二時十分、三代さまご昇天。す

すり泣きの声は室外にも聞こえてきた。

いったん全員病室から退出。四代さまは悲しみを内に秘め、落ち着いたご様子で、昼夜にわたり献身的な奉仕をいただいた田中健一先生（京都工場保険会診察部長）に深く頭を下げ、「ありがとうございました」とあいさつをされた後、廊下の椅子にお座りになり、両手を合わせ、何かご祈念なさっていた。

廊下では、お孫さん方の泣き声が高く響いていた。

三人のお子さま方他、多くのご親族に見守られながらのご昇天であった。ご昇天に立ち会った廣瀬静水先生は、次のように語っている。

「心臓の心拍を示す計器の表示が波形から直線になり、その場にいる全員が死の瞬間を理解できました。担当医師は何も言わず、その瞬間に頭を下げら

れました。ご昇天は、ご生前と何の変わりもない安らかなお顔のままでの大往生でした」

澄んだ空気の中、遠くには比叡の山並みがきれいに視界に入り、病院南側の竹林が、風に大きく揺れていた。

この後、三代さまは、薄いグレーのお召し物と紫色の帯と黒い垂れの木の花帯にお召し替えされ、シルバーの寝台車でご帰死の途につかれた。

京都縦貫道のトンネルを抜け、遠くに折り重なる山々と、緑から黄金色に変わりゆく田が見えるなか、ゆつくりと車列は天恩郷に向かった。

その夜、最後のご面会が許され、その列は遅くまで続いた。泣き崩れ、抱きかかえられながら部屋を出る人、口を一文字に閉じ、涙をこらえる人。

紺毛せんに残された涙の跡が、三代さまご昇天の悲しみを伝えていた。